



神様との関係を見直し、自分と隣人との関係を見直し、自分自身の姿を振り返るために与えられた日だと言えます。だからきっと、安息日には何も仕事をしなければいい、独りで家にこもってじっとしていればいいということではないんですね。ですから今回キリストが招かれたという食事の席も、これから始まる新しい1週間を体力的、精神的、靈的に力を回復して、隣人と共に、そして神様と共に歩いていくための、いやしと喜びに満ちた交わりの場であるべきだったんです。それなのに、実際はそうではなかった。そこに水腫を患っていた人がいたのですが、彼はまるでほったらかしでした。イエスはとても黙って見ておれず、彼の手をとって、病気をいやして帰されました(ルカによる福音書14:1-6)。

しかし、イエスがそんな可哀想な病人をいやし、それを黙って見ていた彼らに「自分の息子だったら、自分の牛だったら、安息日だからと言って助けずにおれるのか」と苦言を呈した後も、彼らは上席を選んだりしているわけです。ここからが今日の話になるわけですが、イエスはここでも彼らに一言ずつ言わずにはおれなかった。一言ずつというのは、上席を選んでいて客に対してと、招いてくれたファリサイ派の議員に対してです。

まずイエスは、上席を選んでいて客に言います。「婚宴に招待されたら、上席についてはならない。後からもっと身分の高い人が来て、席を譲らないといけなくなったら、恥をかくだろう。招待を受けたら、むしろ末席に座っておきなさい。誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められるのだ」と。イエスは決して社会的マナーとか謙遜の勧めとかいうレベルの話をしているわけではありません。イエスは、人よりもよい席を選ぼうとする、上座を選ぼうとするような彼らの姿が、自分は相当の者であると自惚れている者の姿であることを指摘しているんです。他人と自分を比べ、自分の方が正しいはずだとか、自分の方が上、よい席に座ることができるはずだなどと思い込むことが、まさに他者を見下し、押さえつけ、切り捨てる差別の構造にはまってしまっているんだと。

次にイエスは、食事に招待してくれた人にも言います。「昼食や夕食の会を催す時には、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。宴会を催す時には、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ」と。昼食や夕食の交わりには、もちろん気心の知れた人、仲の良い友人を呼んだほうが楽しめるでしょう。しかし、弟子たちだけでなく、ファリサイ派であっても、また徴税人や罪人であっても、そんなことにとらわれず食事を共にし交わったイエスは、

私たちがそのように親密な者同士だけの閉じられた交わりで満足してしまうことを望んではおられないでしょう。イエスは次のように言っておられたことを憶えておられるでしょうか。「自分を愛してくれる者を愛したところで、あなた方にどんな報いがあるか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか」と。イエスは、私たちが普段なかなか交わる機会の少ない人、特にそのお返しができないような人々を招いて、その出会いと交わりの中でお互いに喜びを分かち合うことこそが大事なことなのだ、と言っているように思えます。しかしそれは改めて考えてみると、イエスの私たちに対する招き、あるいは神様の人間に対する招きと同じ構図なのではないか。私たちは本当にちっぽけな、しょーもない者ですから、キリストを通して神様から受けた多くの恵みに対して、何もお返しすることができません。できることと言えば、私たちが神様の方を向いて、神様の喜ぶような歩みをしていくことくらいですが、それさえも私たちはどれだけできているか。実際そんなこと全くできていないに等しく、それを思うたびに私たちは神様ごめんなさいと謝らざるを得ないような状態です。私たちは神様やイエス・キリストにいつもいつも見守っていただいて、支えていただいて、励ましていただいて、祈りを聞いていただいて、もういただきっぱなしなわけです。だから私たちが、神様にとっても返しきれない御恩のほんのわずかな分を、隣人に、特に日ごろ何かと排除されがちで、何のお返しもできないような人たちにおすそ分けしていくことが、神様に対するせめてもの御恩返しなのだと思うわけです。

「自分という存在もかけがえのないものなんだ」と受け入れるという意味における自尊心というものは、決して自分ひとりの力では育たないものです。自尊心というものは、こんな自分でも誰かに必要とされ、肯定されているのだといううれしい実感や体験によって育てられていくんです。つまり自尊心が育てられる体験は、他者との交わりというものが前提になっているわけで、そんな他者との交わりの中で誰かに受け入れられ、肯定されていくためには、自分も同じようにその誰かを理解し、受け入れようとするのが求められるように思うんです。

「理解する：under-stand」とは、相手よりもより低いところに立って、相手のことを教えてもらおうとすることであるといいます。もちろん私たちは、他者のことを全て理解しきれないはずはないんですけど、でも高い所から眺めるのではなく、相手と同じ目線に降り、あるいは相手よりもより低いところに立つことで、その人について初めて気づかされることもあるでしょう。あいつはああだけど俺はこうだ、自分はいつらよりもこうだ、自分はいつなんかと一緒にされたくない、などと自尊心に

任せて他者と距離を取っているのは、いつまでたっても対話は成り立たず、距離も縮まらず、相手を理解し受け入れることなどできず、差別的な視点からも抜け出すことができていかないうちでしょう。誰かに大事にされたいのはみんな同じ。自分という存在が大事にされたいと思うのであれば、私たちはまず他者の存在を理解しようと、受け止めようとしなさいといけません。水腫の人や、見返りが期待できなさそうな人に対して、まごころから、尊敬を持って、いたわりの声や手を差し伸べることができるような人であれば、自然とみんな自分を上席、上座へと案内してくれますよ。イエス・キリストや神様が私たちに対してくださるがごとく、私たちもお互いに、こちらから相手を理解しよう、こちらから相手を受け止めようとしつつ、かけがえのない存在としてお互いを大事にし合っていきたいものだと思います。